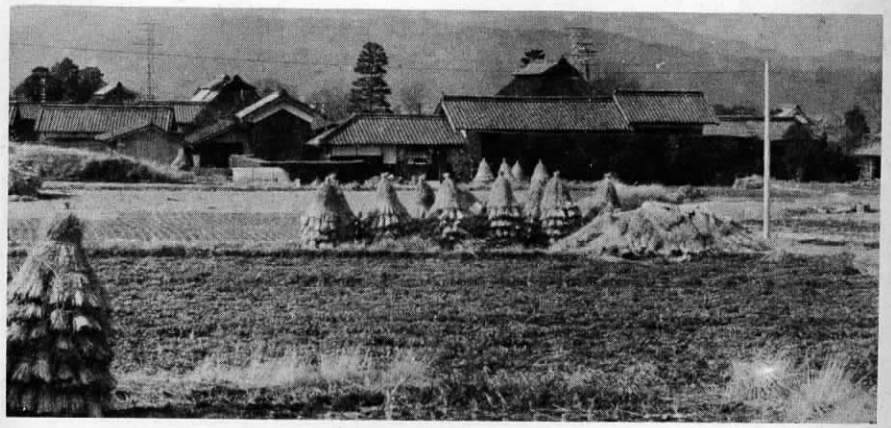
農村診断(1)

大竹作摩
(元福島県知事)



農業では暮らせなくなった農民

百万石の米どころと云われた、会津平野でも農業だけでは暮らしてゆけない農民となってしまった。秋の収獲がおわると、男たちはこぞって都会へ出稼ぎに行く。残った女たちも地元の賃取り仕事に出る。だから福島県下でも、道路工事現場をみると、女労務者が大半になっている。

日本の総人口の七十%以上が、大都会に集まっているというのに、そして東京都の統計をみると、失業手当支給人員が五十万人もあると云うのに、地下鉄工事とか、下水道工事とか、団地の造成工事のような、いやな泥んこ作業の重労働には働き手がない。それを一日三、四千円の高賃金に釣られて、体をはって働くものは出稼ぎ農民だけと云うことになる。これは社会問題としても重大問題であるが、今ここでは論外とする。

さて米どころの会津平野の農業とは云っても、昔ながらの零細個人百姓が大部分であり、その平均耕作反別は一町歩そこそこにすぎない。玄米にして百俵程度の収獲であり、内二十俵は自家用飯米になる。供出米は八十俵、この代金が六十四万円、それから肥料農薬代、農機具部品や修理代、ガソリン代、諸雑貨代を天引きされて、農協勘定は米代トントン、下手をすると赤字が残る。外に野菜とか、コンニャク芋とか、副収入もあるが、それは子供のお小使いにも足らない。

また村に五、六戸しかない三、四町歩農家は、五、六年前までは、供出米代金が二、三百万円もあるので、人も羨やむ裕福な生活であったが今ではそんな農家がかえって困っている。それは農繁期の人手不足にある。季節農業労働者を一人雇うにも、一日四、五千円の高賃金で、朝夕自動車で送迎して、三度の食事も肉や魚付きで、晩食には銚子一、二本も添えることになる。それでも人不足で田植も稲刈りも時期おくれになってしまう。

いやでも機械化することになるが、これがまた機械屋のご奉公になってしまう。大型トラクター、コンバイン、田植機、脱穀機、運搬自動車等々大倉庫一パイ必要であり、あれも百万円、これも百五十万円、その月賦金や修理代に追われて、借金が増大するばかりであり、先祖伝来の田地まで手放す外はなくなってしまう。たまりかねて、そんな農家でも出稼ぎ農民の仲間入りしている。それでは村に頑張っている篤農家はどうか。彼等も無理な過労が限界にきている。個人農家の悲しさ一度病気になったら第一巻の終りになる。

恐るべき出稼ぎ農民の害悪

全国三百万人と云われる、出稼ぎ農民の不自然な生活がもたらす害悪は社会問題としても民族問題としても一日も放任を許さないものがある。これに対して政府も自治体も殆んど無関心に等しいのは、どうしたことか。

毎年半歳近くも、出稼ぎ労働で都会に生活して、華美で不健全な習慣がつき、農村に帰っても、元の健実質素な生活には戻れないから、食生活も贅沢になり、家庭電化も各戸競争で、カラーテレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機、掃除機、電熱器からクーラーまで際限がない。そして自家用自動車も無い農家を探すのに骨が折れるぐらいである。

それが悪いと云うのではないが、肝心な農業の方は明治の百姓と大して変わりがないのだから、苦しいのは当然であり、若者は魅力を失ってだんだん村を捨てる。年寄りたちも未練のあるのは、私有農地だけ、これではお先き真っ暗と云う以外はない。

いやそんな物質的なこととは比較にならない重大問題がある。それは出稼ぎ農民とその家族の、不自然な生活がもたらす、保健、衛生、風紀、孤閨、等の問題である。精力絶倫のほまれも高い政治家の皆さん身に覚えがあろう。青壮年の健康な男性が、毎年半歳近くも家庭を離れて、誘惑の多い都会で孤独生活、無難であったら不思議というもの、全国的に梅毒の蔓延に無関係ではあるまい。

一方農村に置き去りされて孤閨を守る妻の立場はどうか。アメリカでは妻を三ヶ月以上別居生活させると、慰謝料つき離婚の理由になるそうだ。日本の人妻だって、毎年半歳近くも不自然な孤閨生活を強いられてなんの人生か。不義あやまちも天然現象であって、人間の罪ではない。弱い女性を責めても無理であろう。

かくして農村に噂の絶えない、人妻と行商人の駆け落ちとか、道路工事監督と夜逃げをしたとか、不倫痴情話も苦々しいが、そんな表面化したものよりも、一層恐ろしいのは秘密の乱れ、出稼ぎ農民の不自然な孤閨生活がもたらす、人心の頽廃、風紀の紊乱、悪性性

病の蔓延、これを一体どうする気か。どうも今の日本の政治家は利口で打算的で、自分の利益にならないことや、選挙の得票につながらない問題には、決して手出しをしないが、土建業者の餌食にされながら、不自然な生活の犠牲になっている、出稼ぎ農民対策は急務中の急務である。

孫の為に植林する老農の心

農民に百の説法をとくよりも、孫の為に植林する老農夫の気持ちを活かす政治が必要だ。家の修理に材木が必要になり、伐採に山にいった爺さん、あれにしようか、これにしようか、と一日中首を痛くして見て廻ったが、どの木をみても愛着がでて切る気になれず、とうとう夕方手ぶらで帰宅して家族のものに大笑いされたという。この老農の気持ちが何千年来、農村を守り山林を育ててきたのだ。

自然界に山川草木を友としてきた農民の心、それを軽視した政治が農村を荒廃し山林を禿山にしてしまった。いくら時代が進歩しても農は国の基、民族の故郷である。GNP世界第二位も、外貨の保有高世界第一位も、そんなものに永久性はない。この先何年保つか、奢った平家は二十年で亡びた。紀ノ国屋文左衛門の豪奢も十年と保てなかった。孫のために植林をする尊い老農夫の心を汚しては国が危い。日本の税制なども、この点を考えて改革する必要があろう。

わしが知事時代のことであるが、政治資金の必要から、山林を担保にして銀行から借金をしたが、期限に返済できない。銀行では立木を処分して返済金に充当したいと云うので一任したところ、四千万円に売れたから借金返済に充当したという。

それから一年後に突然税務署から、山主であるわしのところに、山林所得税一千三百万円の納税告知書がきた。そんな資金があれば借金はしない。だが税法上の所得者であるからしかたがない。自分のことは云いたくない孫の為に植林する老農の心を傷つける税制を責めるのだ。山林所得税など課税することは、山林のもつ特質を知らぬ愚政である。

全国何千万町歩の国有林から、年々莫大な林産収入がある。それは全部林野関係の人件費その他に使用して不足金何十億円を国民の税金で補充している。これは無駄の多い官業のせいもあろうが、根本的には山林事業そのものが儲かるものではないのだ。

親子三代の汗の結晶を一年決算主義の税制対象として累進課税で大半を巻き上げる。これでは山は禿山になるばかりであろう。元来山林事業は治山治水にあって、その効果は天候、降雨、洪水、灌漑、水道事業などの調節に役立ち、その真価は木材収益などの幾千倍か計り知れないものがある。この認識を忘れては国を誤る。樹齢に達し伐採して利益があれば、植林の育成に授すべきであり、山主にこれを義務づけるのはよいが、課税対象にすべきではない。

陳情政治が農村を誤る

わしは農村に生まれ、農村に育ち、肥桶もかついだ。草刈も山仕事もした。中年から村長にかつぎ出されて、それから県会議員、議長、知事、代議士と半世紀も勤めたが、家族のものは農業から一歩も離れなかった。世間では百姓知事とも云っていたようだ。それだけに農村事情も農民心理も知っているつもりだが、このままでは日本農業は、大変なことになる。第一若者が農業に魅力を失っている。

年寄りも未練のあるのは私有農地だけ、昔のように村を愛するとか、農村を守るとか、そんな気風がなくなっている。

わしが村長時代の北山村役場は、村長以下吏員が七名であった。徴兵事務など時々徹夜することもあったが、誰も不平一ツ言うものは無かった。村会の開催も夜であり、渋茶一パイで深夜まで話し合ったものだ。村長の村内巡視も、ワラジばきの徒歩であった。あの当時は村財政は村税だけで賄っていたのだから血の出るような納税である。一銭一厘でも、無駄使いもなかった。そして農村全体に村を良くしようとする、純な気持ちが漲っていた。

たしか昭和五、六年ころか、税制が変わり国から、自治体に財政補助金が交付されるようになった。それから次第に中央集権政治に変わって行き、町村も財政面から独立性を失い、どうもおかしくなりはじめて、ついに二割自治とか、一割自治とか云われ、国への依存度が高まるにつれて、町村長も町村会議員も、地方交付金の獲得競争が本職のようになり、裏口工作の巧みなものが、名町村長、名町村会議員として、もてはやされて、昔の不言実行主義の真面目人間は相手にもされなくなってしまった。そして陳情に腐敗はつきもの、中央も地方も洗ってみたら大変なことになっているであろう。町村民だってだらけるのも当然であろう。

北山村は戸数こそ増加したが、人口は減少している。村役場の事務はたしかに複雑にはなったが、厄介な徴兵事務は無くなっている。それでも吏員の数は六十余名、自家用自動車が七台、大型トラック三台もある。そして可成り派手に動き廻っているようだ。会津の片田舎にも、昭和元禄の風潮は遠路なく流入している。日本はもうこの辺で強力な歯止めをしないと大変なことになろう。

続く

病める農村の処方箋

手塚信吉氏

農村診断に答えて

手塚信吉

日本農村の問題は、国家の最重点問題として取組まなければならない段階にきている。卒直に云って日本農業は、とっくの昔に自主性を失って禁治産者化しており、政治的な保護で余命を保っているに過ぎない。農業をここまで弱体化したのは、無定見な政治の罪であろうが、主権在民、民主々義日本である。矢張り責任は国民が負う外はない。現に迷惑

を蒙っているものは国民なのである。

それは米でも肉でも牛乳でも、世界相場の二倍三倍になっており、その上に年々何千億円という食管会計の赤字まで、国民の血の出るような税金で尻ぬぐいさせられている。それでも今の農村では、農業だけでは暮らしてゆけない農民に成り下り、高賃金に釣られて土建業者の餌食になって、年々半歳近くも妻子を農村に置き去りにして、不健全な都会への出稼ぎ労働者となっている。この不健全な都会への出稼ぎで、不自然な別居生活を余儀なくされる諸弊害は、単なる経済問題ではない。亡びゆく農村対策と共に、一日も放置を許さないものがある。大竹先生の農村診断に答えて、病める農村への処方箋を書くことにした。

病原体は何か（時代逆行の農政）

世界は機械文化時代、農業と雖も例外ではない。近代農業とは高速道路を大型トラックで疾走するような農業である。それを三輪車で追いかけるような日本農業であるから、いくら補助金を支給しても、手厚い保護を加えても、追いつくものではない。抜本対策を怠っていると、農産物価は四倍五倍とはね上るばかり、無理に押えると、農業そのものが総崩れになる。二千万農村民の余命を保つために、一億国民共倒れとなる恐れもある。

それを回避する為には、農業近代化が急務であるが、さて肝心な農耕地が、何千万分にも細分化して、零細個人農民の所有となっており、その所有権絶対を憲法で保証しているのだから、今更どうすることもできない。自発的に協同化して近代化農業に踏みきらせたくも、大半の農民は農作物本位の農地改良に意欲がなく、土地思惑を目的とする考えかたに変わっているから始末が悪い。

それと云うのは、例の農地改革で、ただ貰ったような農地が宅地となって何千万円、何億円と値上りして、笑いの止まらない百姓成金が、都市周辺に何十万人もあり、豪華な生活を見せ付けているので、真面目な農民根性を傷つけられるのも無理ではない。

国家百年の経倫を忘れた政治は恐ろしい。善政とみせかけて日本弱体化が狙いである占領政策の一ツであった「農地改革」。西独では国情に合わないとして拒絶したというが、日本では、易々として受け入れ、六百万町歩の農耕地を、一千万分にも切りきざんで、小作農民に分与してしまった。農民の感激は大変なものであったが、さて政治というものは目先の意欲を制して将来へ導く可きもの、達見さえあれば、平和条約後でも、農地対策はあった。だが選挙の得票だけを考えている政治家では、選挙民の利己心を制する力量は出ない。近代農業からみると、無価値に等しい小間切れ農地が今もそのままになっている。

この点、中華人民共和国の政治家は偉い。中国でも孫文の辛亥革命以来、「耕者有其田」が理想の旗印であり、貧しい小作農民たちは革命が成功すれば、小作農地が自分のものになると云うので、革命軍に大いに協力した。そして三十年後、ついに革命政権が成立した。公約通り小作農地全部を開放して分配されてしまった。農民の喜びは大変なもので、真夜中まで、一家総出で我が田を廻り歩く提灯の光でにぎわったという。

ところが一戸当たりの農地面積が、僅か六畝か七畝（日本流に云って四反か五反歩）、これでは自作農と云って、永久貧農にすぎない。そして機械化も近代化経営も出来ない。新政府は考えた。共同化も強制しては反抗もあろう。心から共鳴するのでなければ成果も挙らない。政策的苦心はそこにあった。

先ず毛沢東思想精神を徹底的に普及し、人間的良心を最高度に引出し、中国に昔からある良風美俗の一ツ、互助組の慣習を生かして、合作社に進み、模範的な人民公社を計画的に創って好見本を示し、協同体化の有利なことを教え導き、飽迄農民自身の自覚を促がして順次拡大して行った。斯くして政府も驚くほどの速度で浸透してしまった。

僅か十年にして、中国農家戸数一億二千万戸人口五億五千万人、その九十五%までが人民公社に参加し美事な成果を示している。かくして北京政権成立当時、世界中の誰一人、その永続性を信じなかった、中華人民共和国が二十二年後の今日、世界三大国の雄、米中ソ時代を出現せしめ、中国を除外しては国際舞台の歯車が廻らないほどの、国力を発揮しているのも、その中核となるものは、人民公社という、協同体社会の健全な発展にあるといわれている。

日本では今日でも、協同体とか協同体思想文化を軽視している傾向にあるが、世界の大勢は対立闘争の時代をおわり、協同協力の時代に入っている。だから国家でも、社会でも、企業体でも、協同体化、協同体思想の成否が、その盛衰決定の鍵となる時代である。私はこの信念に基いて、十年前から協同体思想の普及に挺身している。

日本の支配層の人々が、好むと否とに拘わらず隣邦中国の思想文化が奔流となって押寄せるであろう。人間平等観を核とする、協同体の思想文化は、世界の声でもあり、働くものの光明でもある。日本農業に暁光をもたらすのも、その協同体化あるのみ。

産業革命の試練を知らぬ日本農業

あらゆる産業の進歩発達は、産業革命の試練のたまもの、と云うも過言ではあるまい。世界第一級に伸上った日本の紡績業も、糸車から、手紡機まで何百万人の優勝劣敗のくりかえしから生き残ったものであり、各種の鉄鋼工場も町の鍛冶屋を踏み台にして今日の隆盛をみたのだ。明治の日本は人力車文明といわれて、都市の主要交通機関は人力車であった。それが自動車の発達で、ことごとく敗退してしまった。馬車も荷車も同様であるが、一銭の涙金もなく亡び去っている。

ところが日本農業は、食料統制のかげにかくれて、その産業革命の試練を回避して今日に至っている。これは資本主義日本としては邪道であり行き詰まりも当然である。日本はれっきとした資本主義国、農業と雖も例外ではない。もし日本農業も、資本主義的、自由競争原理に従っておれば、あの終戦後の日本工業発展時代に、大半の小作農民は有利な工業労働に走り、残された農地は地主の手により、近代化農業に生まれ代り、世界競争にも耐え得たであろう。

元来農業は、機械化大企業経営に最適な事業であり、高度の技術を応用するためにも、地主経営農業の近代化を助成することが、国家的にみて有利であったであろう。何れにしても、零細農業を価格政策で保護してきたことは、都市の自動車を制限して、人力車を保護したに等しい時代逆行であった。だから運賃が二倍三倍になっても、人力車夫では生活が出来なくなって、自動車の運転手に走るものが大半となった。これが今の農民の姿である。

零細個人農業の成り立つ時代ではない。すでに日本には専業農家は殆んどない。無理な出稼ぎ農民も主客転倒して、農業が副業化して留守番農業、別荘農業に変化して、農地の無駄使いから、極度の食料減産をまねき、大問題化するのもあまり遠くあるまい。

食料自給率五〇%を割れば危険信号

日本の食生活をみると、現在でも不足しないのは、米だけである。米に代わって主食化しているパンの原料小麦の九〇%、日本人の嗜好品である味噌、醤油、豆腐、納豆、豆麺、などの原料大豆の九〇%、砂糖、食塩の八〇%、それから日本人も澱粉食から蛋白食に変わり、その需要量はますます急増しつつある家畜の飼料の八〇%、その他輸入食料依存度は加速的に増大し、すでに総食料需要量の三五%に達していると云われている。

日本の既存農地は約六百万町歩、放牧適地三百万町歩、これを適地適作よろしきを得れば、人口一億日本人の完全自給自足可能であるという。それが既に輸入食料依存度が三五%というのは、無計画、無駄使い、そして小間切れ農地の経済価値喪失が主原因である。

自給食料五〇%以下であったイギリスが世界大戦で苦況に陥って以来、五〇%を危機限界と云われ、西独では七〇%絶対確保を国策としており、欧州経済総合でもフランスとの間に小麦協定の不調が大問題になった。現段階の世界情勢であるかぎり、四方を海に囲まれた、日本の食料生命線は、矢張り七〇%限界であろう。この点からみても、経済性を失った小間切れ農地を放置すべきでない。

日本農業唯一の活路は協同体化

狭い国土の貴重な農地、最大最高度に活用する国家的使命がある。その国家的使命を果たし得ないものに、貴重な農地を私有せしめてはならない。この見地からも六百万町歩の農地を一千万分にも細分化して、近代農業からみて無価値に等しい現状を放置すべきではない。こんな不合理が永く許されるはずがない。天の声となって是正を余儀なくする日が必ずくる。それは十年以内であろう。

昭和四十六年度、朝日農業賞の受賞者をみると、五件全部が共同化農業の先覚ばかりであった。農林省もようやく篤農家本位をやめたらしい。共同化以外に日本農業の活路のないことを認識したようだ。だが農民自らが立ち上らない限り政治家は動けない。選挙の得票を気にするからだ。

近代農業の規模は少なくとも農耕地百町歩は必要であるから、一部落とか一村の共同化が必要である。古い習慣を打破することは勇気がいる。だが思い切って実行すれば、洋々とした新天地を発見するであろう。

もう八年前であるが、会津地方にも協同体思想の普及講演に行ったことがある。山都町などは、公会堂が満員の盛況、講演終了後に拙著『新しい農業キブツ』一五冊の注文もあって『月刊キブツ』の申込みも続出した。唐橋町長から一ヶ月後に書面があり、今も感動の話題がたえないとのことであった。これはどこの講演会でも同じであり、農民の意識の中に共同化の必要を痛感している何よりの証拠であろう。中心人物を得て本気に動き出せば、一村協同体化も、一部落協同体化も、不可能ではない。今こそ地区農協役員も立ち上がる時であろう。これからの日本には、太平洋の大波のように、中華人民共同国の思想文化が押し寄せるであろう。

日本は日本的な農業協同体化方式を考えて前進する気力がなければ、好むと否とにかかわらず中国の思想文化に圧倒されて混乱を起こし思わぬ不幸をみる恐れがある。